

三屋の村を見下ろす丘陵に、巨大な前方後方墳が築かれようとしている。多くの村人は大和政権から派遣された指導者のもと、昼夜を問わず新たな支配者のシンボルの造営にかり出される。その墓は、外観のみならず棺を納める場所にいたるまで、細かくつくりが決められていた。

新たな支配者は、この新時代の墓の上で新たな儀式を行い、王としての権威を高めるのであった。こうした古墳の造営、儀式が、全国で同じように行われていった。「古墳の時代」は、「全国統一の時代」でもあった。大和政権の古墳が、出雲の地に造られる。それは出雲にとって、新たな時代の幕開けをも意味している。地方がそれぞれに独自の文化を築き、輝き合っていた時代は、すでに昔となってしまう。

しかし一方で、「地方の時代」の終りは、長く続いた「倭国争乱の時代」の幕が閉じたことをも意味していた。

